

山東京伝

うちだひやつけん
内田百閒

内容理解

この文章で作者は、山東京伝と彼を慕う書生との関わりを、夢の不思議な物語で描こうとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

妻子も、親も、兄弟もない私は、山東京伝を崇拜して書生となり、玄関番を役目とした。……

・一人ぼっちでいたようである。……（夢であることを思わせる表現）……

・私の部屋はなく、玄関の障子の陰に机を置いて、その前に座っていた。

・¹ に思うことはなく、山東京伝の傍にいられるのが、うれしかった。

・机の上で一生懸命に揉んで、机のまわりに、ざらざらするほど、² をためた。

・いろいろの人が訪れたようだけれども、はつきり覚えていない。……

← 御飯の時間が来た。

・御飯を食うのは、非常に奥の方の、白けたような座敷であつた。……

・山東京伝は知らん顔をして、椀の中に箸をつけていた。猶のこと、山東京伝を³ し
たくなった。

・膳について、辺りに、自分の影が散るような心持がして、気になった。……

・黙っていられなくて、何か言つて怒られても困ると思つて、もじもじしていた。

・山東京伝は、知らん顔をして汁を吸う。いよいよ⁴ ⁵ する心が募つた。

・食えと言つてくれないが、早く飯が食いたい。むやみに ⁵ しているのはかえつて悪いかもしれない。今、食えと言おうとしているのかもしれないのに、無遠慮に箸をつけるのもよくない。私は、膳を前に置いて、もじもじ迷っていた。

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

上座（二二九・12）

無遠慮（二三〇・12）

心外（二三・10）

当惑（二三・14）

